宝の海から

白浜で出会った生きものたち

⑤⑨

京都大学助教授　久保田　信（京都大学瀬戸臨海実験所）

水族館解説ツアー

県外からの参加者が7割

全国の国立大学が法人化されて以来、研究はもとより、教育方面にもさらに力を注ぐようになってきた。瀬戸臨海実験所も本年度から年中無休とした水族館を活用して、初の試みとなる「水族館解説ガイドツアー」を企画した。冬休みの特別のイベントとして、水族館の水槽めぐりはもとより、普段見られない水槽の裏側も案内することにした。

保護者同伴の小学生などは無料とするサービスも、これまでの規約を改正して取り入れた。前半は12月25日から大みそかまでで、後半が1月4日から10日の成人の日まで。14日間で午前と午後に1回ずつ計28回実施した。県外からの参加者は7割もいた。

私が担当したのは最後の連休3日間で、計52人を案内した。県内からは25人、県外から27人で、参加率はちょうど半々だった。家族連れとカップルがほとんどで、単独の参加者はまれだった。

3連休中の中日の9日が最も多くの参加があり、この日の合計が36人だった。残念だったのは、連休初日の午前と最終日の午後が、人数が多くなかったことだ。連休の始まりと終わりは移動日などにあてただろう。実施時間も十分考えたのだが、多少の変更が今後は必要かもしれない。

「水槽巡り」でよく入っていたのは、大みそかの午後で、22人と定員オーバーするほど大盛況だった。この日は所長の白山義久先生が担当された。次に多く入ったのが、1月9日午後で19人の参加があった。続いて、1月9日午前と12月29日の午後の部で、17人ずつだった。16人ずつの参加があったのが、12月28日の午前と午後で、この日も白山先生が担当された。

1回のガイドを30分の持ち時間としたので、飼育・パネル・標本展示している約800種類もの海洋生物を網羅した当水族館の全容をこと細かくは紹介できない。そこで、私は、自身の専門分野である刺胞動物門の解説に焦点を当てた。それぞれの教員が、得意とする分野を紹介すれば、リピーターがいても参考になるだろうとの配慮もあった。リピーターも確かにいたし、これまで何度も水族館を見学にこられた方もいた。説明の内容にも関係するのだろうが、保護者の方が子どもたちよりも熱心に質問していた。中には終了後も記念にと、私も仲間にはいって写真撮影された方もおられた。

「ふだん聞けない話がとてもよかった」とか、「この子はクラゲや貝類が好きなので参考になった」などの感想のほかには、水槽展示に関する質問としては、「八放サンゴ類のウミトサカ類やヤギ類がいる水槽で、水流が果たしている役割はなんでしょうか？」などと質問された。

子どもたちの中にはクラゲの説明の途中で、海岸で拾ってきた貝殻をポケットから次々と出して、名前をしきりに訪ねてきた。

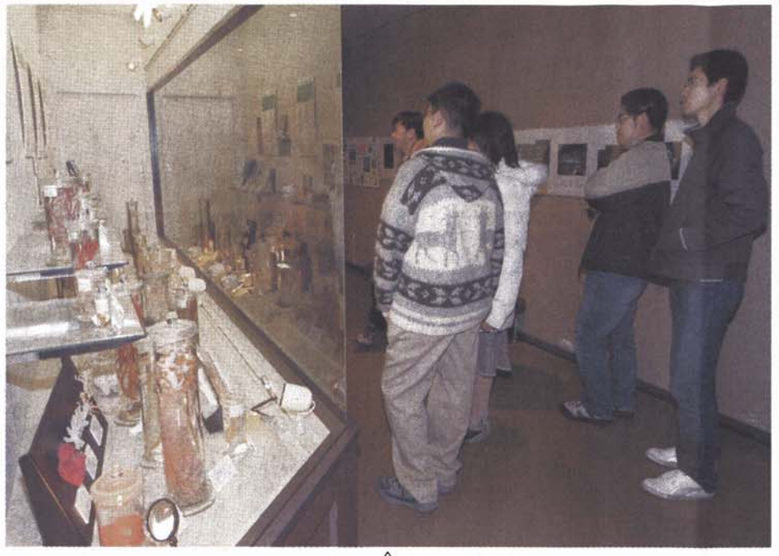
それでも、30分原則を守ろうとはしたものの、予期せぬ質問が多いと、持ち時間が倍になったこともしばしばあった。声がよく通るように、よく分かるようにと拡声器を使用したが、熱を入れた説明をしたせいか、2日目が終わるとのどが痛くなって困った。得意のカラオケではこのようなことは絶対にないのに使うところが違うのだろう。

ガイドでは、紀伊民報に連載中の「宝の海」で紹介しているように、海は生命のふるさとで、陸で見られない不思議な動物で満ち満ちているということを、その当時に所長だった原田英司京大名誉教授がまとめられたパネルを使って説明し、参加者の皆さんにこのポイントを納得してもらえた。まもなく小学館から発刊されるNEOシリーズのひとつ「水の生物」の校正がちょうどきたばかりだったので、目次などの一部をみせながら、無脊椎（せきつい）動物の全部の動物門を含んだ濃い内容であることと、たった2000円という廉価な図鑑であることなどを宣伝しておいた。ちなみに、この近刊シリーズでは刺胞動物と有櫛動物を担当している。

同ツアー担当部分の解説ガイドの別の大事なポイントとしては、各種の動物の一生はすべて卵からはじまり、人も1個の受精卵から羊水の『海』に生きる魚の時代などを経て人間の赤ちゃんと発生・進化して誕生していることを説明した。また、多細胞動物で神秘の性質をもつ不老不死のベニクラゲの一生を、壁に張ってある新聞記事を見ながら説明し、大いに驚いてもらった。

さらに、特集展示コーナーの刺胞動物の固定標本や、その対面にかけてあるクラゲ類の写真パネルや世界のクラゲ切手類などを活用して、この動物門の分類と進化の幾つかの特徴などを説明した。オーストラリアの有袋類の例などをあげながら、多様性への放散と収れんという他人の空似の不思議な話も交えた。

連載13回に登場した夜眠る『花』サンゴイソギンチャクの謎についてクイズ形式で答えてもらったりもした。クイズの答えの鍵をにぎる光合成についても、人間が作った工場で太陽光から炭水化物を植物のように作れたら、ベニクラゲの若返りの秘密の解明と同様に、ノーベル賞級の研究成果だと強調しておいた。



△刺胞動物コーナーで興味津々の参加者

△水槽前ではクイズ形式の説明も

△職員が手作りしたPR用のポスター